

- 1 派遣期日 令和 5 年 1 1 月 1 0 日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）宇都宮市立鬼怒中学校
所在地 〒321-0901 宇都宮市平出町 3764-10
<http://www.ueis.ed.jp/school/kinu-j/>
- 3 研修内容 研修会名：第 4 7 回関東甲信越地区中学校英語教育研究協議会
研究主題：他者とつながり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成
～「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる指導を通して～
派遣先研修内容：第 3 分科会「見方・考え方」を働かせた「読むこと」の言語活動の充実

4 感想

今回、研修をさせていただいた宇都宮市立鬼怒中学校では、主題に迫るための目指す生徒像を「目的・場面・状況に応じて、比較的短い記事やレポート、資料から概要や要点などの必要な情報を読み取り、その話題に対しての自分の考えや気持ちを表現できる生徒」と設定し、研究に取り組まれていた。そして、そのための手立てとして「生徒の習熟度に応じたリテリング指導の工夫」と「個別最適な学びを促進し、学びに向かう人間性を育てるための ICT（一人一台端末）の活用の工夫」を実践されていた。

日立市では「互いの考えや気持ち、情報などを英語で伝え合う対話的な言語活動」を重視している。本校の生徒も外国語を用いて自分の考えを進んで伝え合ったり、相手のことをより深く知るために進んで質問したりするなど、外国語科の授業において意欲的にやり取りをする場面が見られる。その一方で、英語の「読むこと」においては、英文から得られた概要や要点についての自分の考えを話したり書いたりすることに関して、自分の考えを整理し、筋道を立てて話すことができなくなる生徒が少なくなかった。そのため、本校では『読むこと』により概要や要点を捉えて、得られた情報や表現を活用し、話したり書いたりして自分の考えや気持ちを表現する力」を育成することに課題があり、その解決のために鬼怒中学校で実践されている「リテリング指導の工夫」と「ICT 活用の工夫」を本校でも取り入れたいと考えた。

今回の授業では「(教科書の登場人物による) 電話でのやり取りを聞いたり、読んだりして、自分の考えを表現することで、会話の要点を捉えることができる。」という目標が設定され、リテリングと ICT の活用が重視されていた。以下では、本校の外国語の授業に取り入れていきたいと感じた点をまとめていく。

1 点目は、単元を通じた学習の中で、本文から読み取った「目的・場面・状況に応じて、比較的短い記事やレポート、資料から読み取った情報」についての自分の考えや気持ちを表現する方法を、生徒の習熟度に応じて複数用意していた点である。外国語が得意だと思われる生徒は、He や She を使った三人称の視点で本文についてリテリングをしながら自分の考えを話していた。それに対して三人称視点で表現することが難しい生徒は、登場人物になりきり、一人称視点でリテリングをしながら自分の考えを話すなど、その生徒に合った方法でリテリングができる環境を整えていた。



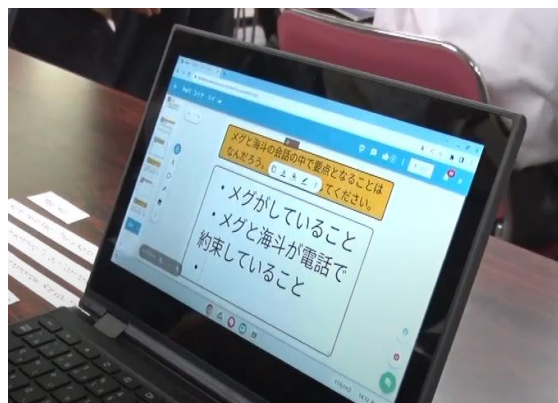
授業の様子

2点目は、英文を聞いたり読んだりすることで、その意味を理解できるようにするための「受容語彙」と、自分の考えを話したり、書いたりできるようにするための「発信語彙」の2種類を区別して単元の語彙指導を行っていた点である。当日の授業では、リテリングを行う上で必要な「発信語彙」を定着させるために、語彙指導のために作成されたワークシートを活用し、ペアで英単語の意味と音声を確認し合う活動が行われていた。ペアの一方が、英単語の意味を日本語で伝え、もう一方がその英語を発音するものだったが、多くの生徒が円滑に学習を行うことができていた。また、この語彙習得のための活動後においても、定着させた「発信語彙」を使って、自分の考えを伝えようとしている生徒が見られた。私の授業でも、帯活動として単元における新出単語をペアで確認し合う時間を設定しているが、鬼怒中学校での実践のように、単元の到達目標に応じて、「発信語彙」と「受容語彙」とを区別して指導する必要があると感じた。

3点目は、本時の主な活動であるリテリングの場において、学習形態を「個人→ペア→グループ→グループで選出された代表による全体発表」と変化させていた点である。生徒は、会話文の内容を理解した後、その内容について、自分の考えを交えながらリテリングをしていた。上記のように学習形態を変化させることで、リテリングをする機会と、外国語を用いて自分の考えを表現するための機会を、より多くもつことができていた。さらには英語で話す機会が増え、級友同士で助言し合う場も増えたことで、回数を重ねるごとに生徒の話す内容に磨きがかかり、自信をもって自分の考えを英語で話せていた生徒も見られた。外国語を用いて自分の考えを伝え合う機会をただただ増やすのではなく、鬼怒中学校での授業のような学習形態の変化を取り入れるなど、生徒が自分の成長を実感できるような言語活動の場を増やしていかなければならないと感じた。

4点目は、会話文の内容に関するQ&Aに取り組んだり、自分の考えをまとめたりするときには、紙のワークシートではなくタブレットに入力し、入力した内容を、生徒同士で相互閲覧できるようにしていた点である。これにより、英語を苦手だと感じている生徒でも、級友が入力したものを参考にしながら解答を入力したり、自分の考えを入力したりすることができていた。鬼怒中学校での授業から、ICTを使うことが効果的だと考えられる場面では、本校でも積極的に活用していく必要があると感じた。

鬼怒中学校では「目的・場面・状況に応じて、比較的短い記事やレポート、資料から概要や要点などの必要な情報を読み取り、その話題に対しての自分の考えや気持ちを表現できる生徒」を育成するために、「生徒の習熟度に応じたリテリング指導の工夫」と「個別最適な学びを促進し、学びに向かう人間性を育てるためのICT（一人一台端末）の活用の工夫」の2つを主な手立てとされていた。上記で述べた「生徒の習熟度に応じた自分の考えを伝える方法の指導」「『発信語彙』と『受容語彙』とを区別した指導」「授業形態の変化による言語活動の充実」「ICTの効果的な活用」の4点について、本校でも積極的に取り組んでいきたい。



生徒が自分の考えをタブレットに入力している様子



生徒がタブレットに入力した考えを全体で共有している場面